

【教育ノート】

認知症カフェにおける活動者育成システムの事例研究

—「関西福祉科学大学バリデーション・プロジェクト」による実践を通して—

種村理太郎*, 三田村知子*, 都村 尚子**

A Case Study of a Training System for Dementia Café Volunteers
—Applying Elements of the ‘Kansai University of Welfare Sciences Validation Project’—

Ritaro Tanemura, Tomoko Mitamura and Naoko Tsumura

I. はじめに

国は、2012年9月の「認知症施策推進5か年計画」(オレンジプラン)及び2015年1月の「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」(新オレンジプラン)を策定する中で、認知症支援体制への取り組みの強化を図ろうとしてきた。その中で、認知症高齢者に対する介護者の負担軽減の取り組みとして認知症カフェ^{注1)}の設置・普及が挙げられ、2018年度からは「すべての市町村に配置される認知症地域支援推進員等の企画により地域の実情に応じ実施」することを目標として掲げられている¹⁾。さらに新オレンジプラン改訂版では、「地域の実情に応じて認知症地域支援推進員等が企画するなど、認知症の人が集まる場や認知症カフェなどの認知症の人や家族が集う取組を2020(平成32)年度までに全市町村に普及させる」との目標に改めている²⁾。このような取り組みの経緯は、2019年6月に発表された認知症施策推進大綱にも受け継がれており、2020年度末を目途に認知症カフェを全市町村に普及させることが掲げられている³⁾。したがって国は、一貫して認知症高齢者やその家族が集まる場所を地域に備えておくことを目指している。

厚生労働省による2018年度実績調査によれば、現在1412市町村で7023カ所の認知症カフェが設置され、介護サービス施設・事業所や地域包括支援センタ

ーが主体となって運営しているところが多い。その一方で、認知症カフェが全国に拡大していく当初から、ボランティアが支援スタッフとして認知症カフェに参画しているところもあり、近年では、大学生が認知症カフェの活動や運営に参画するケースも目にする機会が増えている^{注2)}。

そこで本論では、大阪府柏原市で開設している認知症カフェ「カフェほのぼの」での取り組みを振り返り、教員との協働のもとで学生の主体的な運営における認知症カフェの活動者育成システムについて検討していく。

II. 認知症カフェにおける活動者育成の重要性

1. 認知症カフェとは

武地によれば、1997年にオランダで始まったアルツハイマーカフェの活動が認知症カフェの原型であると紹介しており、その活動の目的として、①認知症の医学的、心理社会的側面についての情報提供、②1人の人としてあるがままに尊重して受け入れること、③認知症の人たちや家族が孤立するのを防ぎ、孤立から解放されるような支援の推進が挙げられている⁴⁾。認知症カフェでも認知症のある本人や家族と専門職が気軽に交流できる場として楽しむことが目的とされており、それぞれの関係については図1のように示されて

受付日 2019.9.13 / 受理日 2019.12.21

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 講師/**関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

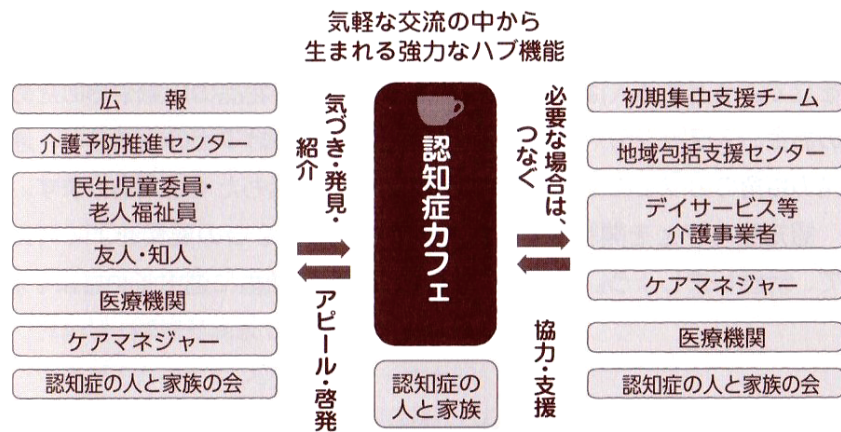


図1 認知症カフェの役割と諸機関等との関係図
 出典：武地一編著・監訳『認知症カフェハンドブック』クリエイツかもがわ，2015年，37

いる。この図1からも分かるように認知症カフェの参加者については認知症高齢者や家族を中心としながら、認知症について関心のある地域住民や認知症高齢者を支援している専門職、カフェを運営しているスタッフまで、その場に居合わせる人々の背景は多様である。そして、認知症カフェは、「楽しむ」「学ぶ」「相談する」の3つが備わる場であると良いとされている⁵⁾。

さらに、認知症カフェに参加したことによる効果として、認知症高齢者には外出の機会が増えることで社会とかかわっていけるという気持ちが得られること、その家族には、家族同士や専門職への気軽な相談場所であること、カフェのスタッフには、認知症高齢者が持つ力を改めて見つめなおす機会になることが挙げられている⁶⁾。このように認知症カフェに寄り集う人々の中でも求めるニーズや効果も異なるため、参加者の属性に応じた機能が発揮できるように準備することが肝要である。そして、図1でも示されているように、認知症カフェが認知症への気づきや発見の場、認知症に関する情報発信・啓発の場、認知症高齢者や家族と専門職が繋がり、協力・支援していく場として機能することがその意義でもある。

2. 認知症カフェの活動者に求められる力量について

ミーセンによれば、オランダのアルツハイマーカフェでは、協会が共通の運営マニュアルを作成するとともに、企画・運営者の養成研修として3日間の研修を組んでいるという⁷⁾。また武地は、イギリスのメモリーカフェで作成されている手引書を紹介しているが、内容として運営に必要な項目が詳細に説明されてお

り、スタッフに求められるスキルの一例として、コミュニケーション、プレゼンテーション、カフェメニューの提供の役割、守秘義務などに関することが挙げられている⁸⁾。またボランティアの研修内容としては、ボランティアの役割に加えて、認知症に対する認識や応急処置、安全管理、衛生知識なども紹介されている⁹⁾。これらのことから、認知症カフェの原型となった海外の取り組みでは、ボランティアや運営者側に詳細な知識を求めていることが分かる。

武地は自身も携わっている京都にあるオレンジカフェのスタッフに求める力量として、「①認知症について知識がある、②認知症のある人の「できること」「難しくなっていること」を見極めることができる、③傾聴ができる、④安心感を与えるような会話ができる、⑤「してあげる」という一方的な気持ちではなく、友人として共に楽しもうとする気持ち、フレンドシップ、⑥認知症がある人の得意なこと・関心のあることを引き出せる、⑦月2回くらいのペースでカフェのスタッフとして参加できる、勉強会に足を運ぶ」を挙げている¹⁰⁾。概ね、認知症に関する知識や視点とコミュニケーション能力に重点が置かれていることが分かる。しかし一方で、日本で認知症カフェが取り組み始められた当初から、スタッフの人材確保や人材育成が各カフェの活動者に任されている現状が指摘されている¹¹⁾。現在においても、認知症カフェに携わる人材育成に関する共通のプログラムまでには至っていないのが課題である。

Ⅲ. 方法

1. 研究対象と研究方法

本論においては事例研究を用いて、取り組みの振り返りを行う。事例としては、次の3つの理由にて「関西福祉科学大学バリデーション・プロジェクト」（以下 プロジェクト）を選定することとした。1つ目は、本論では、認知症カフェの活動者として学生に焦点をあてており、プロジェクトは学生と関係する教員で構成されている点である。2つ目は、認知症カフェ実践においてカフェスタッフである学生が主体となって運営を担当している点である。3つ目は、認知症高齢者へのコミュニケーションの機会として、学生はバリデーションをもとにしたコミュニケーション実践を行っている点である。バリデーションとは、ナオミ・ファイルによって考案された、認知症高齢者の感情に焦点をあてたコミュニケーション法である¹²⁾。以上から本論では、認知症カフェの活動者育成システムとして学生に認知症高齢者への対応を学習する機会を設ける意義を検討するために、プロジェクトを事例として選定した。

倫理的配慮として、本研究を進めるにあたり、関係者にプロジェクト活動の記録を研究活動に活用することについて説明を行い、了承を得た。

2. 事例概要

大阪府柏原市にある関西福祉科学大学では、2015年度より教員と学生によって構成されているプロジェクトを立ち上げた。なおプロジェクトの全体像は、図2の通りである。ただし、各チームで学生を振り分けているが、これはあくまでも各チーム活動の企画・運営を主に担当することを意味しており、活動時には、すべての学生で分担して行っている。プロジェクトでは、学生が課外活動としてバリデーションを実践する機会を作り、継続的なバリデーションのスキルアップを目指すことも目的としている。そのために、バリデーションを指導できる教員が毎月研修会を行っている。さらに定期的なバリデーションの実践の機会として、大学近隣の特別養護老人ホーム等の協力を得て、学生が入居者に対してバリデーションを試みている。その後、継続的な指導を受けるためにバリデーションを指導できる教員からフォローアップ研修としてスー

パービジョンの定期的な機会を設けている。なお、プロジェクトでのバリデーション研修の企画・運営や学生によるバリデーションの実施状況の把握については、「勉強会チーム」が担当している。

次にプロジェクトでは、認知症カフェ「カフェほのほの」と「コイノニアカフェ」を開催している^{注3)}。オープン当初「カフェほのほの」は、月に1度第2水曜日に開催していたが、学生の授業との両立が難しくなったため、現在は、水曜日のカフェは社会福祉協議会職員と地域ボランティアが中心となって運営しており、参加の都合がつく学生がボランティアとして参加している。一方、第4日曜日に学生が主となって行うカフェを開催している。その他にも関西福祉科学大学の近隣にある通所施設の喫茶スペースを借りて、第2土曜日に「コイノニアカフェ」を開催している。プロジェクトでは、カフェの企画・運営を中心に担うチームとして「カフェチーム」を設けている。

さらにメンバーを確保するために、年2回（春・秋）に学内の社会福祉学科の学生を中心にPR活動を行い、新たなメンバーの加入を促している。また、社会福祉協議会や市とも連携を図りながら、プロジェクト活動の周知を目的とした広報活動も行っている。このような学内・学外へのPR活動などを担うチームとして、「広報チーム」を設けている。これらの各チームによる活動から認知症カフェの開催・運営に関するものを抜粋すると図3のように示すことができる。この体制が、いわば認知症カフェにおける活動者育成システムとして位置付けることができるものである。プロジェクトでは、活動者育成として、認知症高齢者とのコミュニケーションが図れる実践者の育成、認知症カフェ開催に求められる運営者の育成、認知症カフェを対外的に発信していく広報担当者の育成を目的とした体制をとっている。

なお、それぞれのチームには、学生側の役割として、チーフ・副チーフ・副チーフ補佐を配置して、チーム内の活動が停滞しないように促す役割を担っている。またプロジェクトに携わっている教員は現在7名

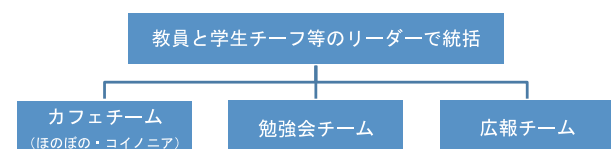


図2 プロジェクトの組織全体図（概略）

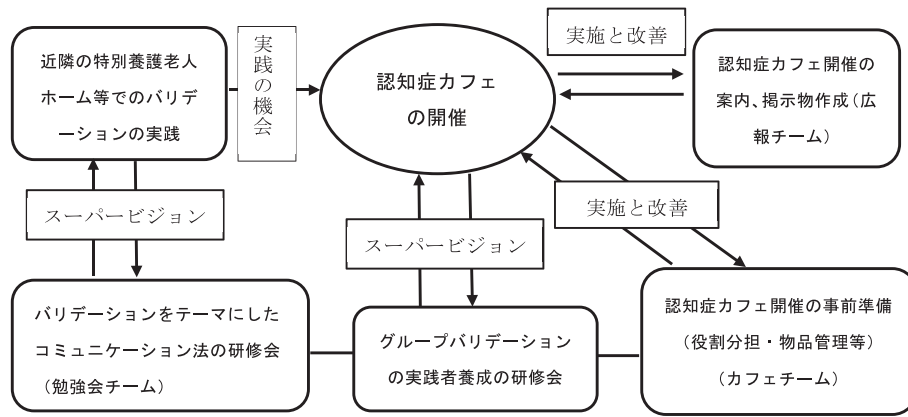


図3 プロジェクト活動による認知症カフェの活動者育成システムの全体像

であり、教員もそれぞれに担当するチームを分担し、チーム活動の指導的役割を担っている。組織全体の統括として、毎月、教員代表2~3名とチーフ等のリーダー層の学生によって、チーフミーティングを開催し、各チームで検討された事案を共有し、プロジェクト活動全体にかかる事項について検討している。検討した結果については、定期的（隔週1回）に開催しているミーティングで共有している。

IV. 認知症カフェの取り組み

1. 「カフェほのぼの」開設までの経緯と理念について

2015年2月に柏原市社会福祉協議会と協議し、柏原市内初の認知症カフェ開設を目指すことが企画された。2015年4月からは、市内の認知症家族介護者の会「いどばた」や市役所高齢介護部門の職員、地域福祉活動を行っている住民ボランティア、地域の高齢者施設職員にも検討会議への参画を得て、開設に向けた準備を進めた。そして、2015年9月に市社会福祉協議会が借りている市内の木造民家の1階でカフェをオープンする運びとなった。

開設準備段階で認知症家族介護者の会「いどばた」のメンバーから、市内の家族介護者の参加者数の伸び悩みの実状があり、家族介護者への活動参加を促したいという課題が見られた。例えば、家族介護者の介護の現状を聞き取る中で、認知症高齢者とかかわっていると、どうしても自身の感情をコントロールすることが難しいことも吐露されていた。家族介護者も認知症高齢者に声を荒げたりしたいわけではないことを自認しているにもかかわらず、接する中で抑えきれない衝

動に駆られるという。

このような家族介護者の置かれている状況があるなかで、日常生活でより良い関係のもと介護が続けられるためにも、介護に必要な知識を得られる機会が必要であり、「カフェほのぼの」では、認知症やバリエーションに関する情報発信のブースを設けている。さらに、「カフェほのぼの」でバリエーションを導入することで、認知症高齢者へのかかわり方を学習できる場としても位置づけることとした。家族や地域住民が参加した際に、「カフェほのぼの」で認知症高齢者へのかかわり方の理解を深め、在宅での介護場面にも応用できるようにすることがその狙いである。また一方で、カフェスタッフとして活動する学生にとっては、認知症高齢者へバリエーションが実践できる機会にもなり、学生自身の学びの場にもなっている。

以上をまとめたものとして、「カフェほのぼの」の活動理念は、図4となっている。つまり、地域住民や認知症高齢者にとっては生きがいづくりの場、家族介護者にとっては相談・語りの場であることに加えて、専門職であるワーカーも参加して、認知症高齢者への

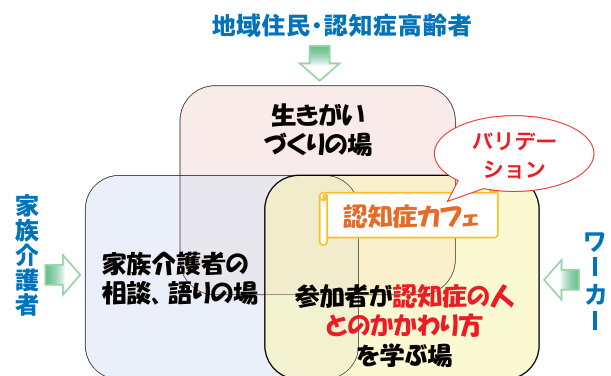


図4 「カフェほのぼの」の活動理念（関西福祉科学大学バリエーション・プロジェクト作成）

かかわり方を学ぶ場にしていくことも考えている。それによって、認知症に関する理解が深まり、認知症のある当事者と家族との関係構築を促したり、地域住民と認知症高齢者との近隣関係の構築を促したりすることも想定している。なお「カフェほのぼの」の取り組みは、新聞などでも取り上げられ、他市からの見学者も多数参加されている^{注4)}。

2. 「カフェほのぼの」での活動内容

「カフェほのぼの」では、学生がカフェスタッフを担当し、大学教員と社会福祉協議会の職員は全体的な統括の役割を担っている。「カフェほのぼの」チームの学生は、カフェ開催に関する企画・運営のコアメンバーとなり、毎回当番制で現地リーダーとその補佐を担当し、他の学生の指揮を担当している。カフェの主なメニューとしてはコーヒー・紅茶・野菜ジュースなどがあり、それに個包装のお菓子を添えて提供している。学生が注文の取り次ぎから提供までを担当しており、メニュー提供後に学生は参加者に声を掛けて、コミュニケーションを図っている。その他にも、キッチンでの提供準備や会計、屋外でのカフェの案内、社会福祉協議会職員とカフェ参加を勧めたい高齢者宅への訪問なども行っている。さらに、バリデーションが必要な参加者には、日ごろ学習していることを活かしながら、コミュニケーションを図っている。なお、表1がカフェほのぼのの開催時のタイムスケジュールの一例である。「カフェほのぼの」の特徴としては、プログラムにグループバリデーションを取り入れている点である。「カフェほのぼの」では、準備段階から認知症カフェにバリデーションを導入したプログラムを試みる事が検討され、具体的な実践方法としてグループバリデーションが導入された。グループバリデーションとは集団の中でバリデーションを行っていく方法で、次のような利点が挙げられている¹³⁾。

- ①グループの連帯意識の向上と交流の活性化
- ②集中力の継続
- ③お互いを気遣う助け
- ④グループの中での社会や仕事での役割や家族関係の回復
- ⑤尊厳の回復から認知症高齢者自身が負の行動を抑制しようとする気持ちの芽生え
- ⑥参加者の自尊心の回復と自立心の取戻し

グループバリデーションでは、認知症高齢者がメンバーであるが、グループリーダーとコ・リーダ^{注5)}がメンバーの支援にあたり、グループバリデーションを進行していく。カフェでのグループバリデーションでは、カフェ参加者を対象に行っている。メンバーについては、認知症高齢者や家族を中心に選定していく。なおグループリーダーやコ・リーダは、教員の指導の下、プロジェクト活動で設定した基準を満たした学生から選抜される^{注6)}。表2が具体的なプログラムの一例である。図5はグループバリデーションの様

表1 カフェほのぼののスケジュールの一例

11:30～	設営準備
12:30～	オープン前のミーティング
13:00～	カフェオープン (参加者が自由に過ごせるようにフリータイムとしている)
14:00～	参加者の利用人数を確認しながら、グループバリデーションの実施 (1回30分から40分程度)
15:00～	フリータイム・学生やボランティアによるレクリエーション
16:00～	カフェ終了、片づけ
17:00	ふり返りのミーティング

表2 「カフェほのぼの」のグループバリデーションの一例

①	オープニング (音楽をかけながら、参加者の着席を促す)
②	メンバーごとの役割分担の選定 例：グループミーティングの開会と閉会宣言する等
③	メンバーによる開会宣言
④	メンバーによる合唱
⑤	テーマに沿ったディスカッション
⑥	アクティビティ (軽運動)
⑦	おやつなどの軽食
⑧	メンバーによる合唱
⑨	メンバーによる閉会宣言
⑩	クロージング



図5 グループバリデーション (アクティビティ) の様子

子である。

3. バリデーションを用いた取り組みの成果

(1) カフェ参加者に対して

「カフェほのぼの」でバリデーションに関するプログラムを実施する中で、参加者は驚いた反応を示すことがある。それは、認知症高齢者が日ごろの自宅での様子と異なる振る舞いや反応を示すからである。例えば、参加した夫が、バリデーションのプログラムで発言した際に「大切な物は一番は嫁はん」と語ったそうである。この発言を聞いた妻は驚き、日ごろ家ではそのような発言は見られないとのことであった。

バリデーションは本来「強化する」という意味合いであり、今回のケースでも本人の感情が強化されて、言葉として紡ぎだされたと言えるのではないだろうか。また、別の参加者からも「カフェほのぼの」に来るようになってから、自宅での本人の様子に落ち着きが見られ、家族が本人と冷静に向き合える機会が増えたということも聞かれた。これらのことから、認知症高齢者と家族の関係性が再形成されていったと考えられる。認知症カフェの効果として「本人の主体性を存分に発揮できるかどうか」、「本人と家族の関係性を変えるものかどうか」ということが挙げられており¹⁴⁾、この点からも認知症高齢者と家族との間に変化がもたらされたと理解できる。

(2) 学生に対して

カフェスタッフとして、またグループバリデーションのグループリーダーやコ・リーダーを担当することにもなる学生は、日ごろからバリデーションについて継続して学ぶ機会がある。彼らは、日ごろから、大学での研修会でバリデーションの理論的背景や技法を学んでいる。さらに、特別養護老人ホームの入居者やサービスの利用者を対象に、週に1度バリデーションを行っている。それらに加えて、月に1度の「カフェほのぼの」でグループバリデーションも取り組んでいる。このような機会を得ることで、学生自身に認知症高齢者への捉え方に変化が起きている可能性がある。ある学生に尋ねたところ、バリデーションを学ぶ前では、認知症高齢者のイメージとしてコミュニケーションが取りづらく、相手のことを理解することが難しいと考えていたという。それがバリデーションを学

び、取り組んでいく中で、認知症高齢者にも感情があり、伝えたいことがあるということが分かり、バリデーションの関わりを通じて、それを理解しようと変化してきた。そして、コミュニケーションも図ることができるということが実感できたというのである。認知症高齢者への関わりに困惑を感じる人が多いことはよく指摘されているが、学生は認知症高齢者に継続して関わっているからこそ、肯定的な関わり方ができることに気づいていった。

以上のようなバリデーションに取り組む過程を通じて、学生は認知症高齢者への関わり方に自信を持つようになり、関わることへの意欲も高まっていった。このことは、プロジェクトにおける一連のバリデーションに関するコミュニケーション法の研修が、学生に好影響をもたらしていることを示唆している。

(3) 地域住民や専門職に対して

「カフェほのぼの」でバリデーションに取り組む上で、使用しているものに啓発物がある。具体的には、バリデーションに関するDVD、学生が作成したバリデーションの紹介ポスターなどである。この取り組みは、「カフェほのぼの」を情報発信の場として機能させるためでもある。カフェ参加者やカフェスタッフの多くは地域住民であり、専門職に比べて、圧倒的に専門的な知識が不足していることは自明である。そのため、認知症に関する情報や対応方法であるバリデーションについて知る機会を得ることで、日常生活に活かすこともできる。さらに、これまでバリデーションを知る機会がなかった専門職にとっても、情報を得る場になる。

また、カフェのプログラムであるグループバリデーションでは、デモンストレーションとして地域住民の方に参加してもらう機会も作っている。この取り組みは、間接的にバリデーションを経験したり、学んだりする機会を得ることで、家族や地域住民の方に認知症高齢者への関わり方に共通した理解が得られるための働きかけである。このようなことを通じながら、認知症カフェでバリデーションに取り組むことによって、地域住民が認知症高齢者への関わり方を学ぶ場にもなり得るといえる。

V. おわりに

認知症カフェでは、様々な人が出入りし、それによって新しい出会いが生まれ、新たな関係性が築かれていくことがある。ここでは、地域住民間のみならず、医療・保健・福祉に関する専門職とのつながりも生まれ、地域ケアにおける気軽な相談場所にもなり得ることが示されている¹⁵⁾。「カフェほのぼの」においても、このような場を目指すにあたり、学生は日々の活動からバリデーションに関する学びによって、認知症高齢者へのかかわり方やコミュニケーション能力を鍛える機会が与えられた。さらに、「カフェチーム」が中心となり当日のスケジュール管理などの運営面を担うことによって、認知症カフェの取り組みは安定している。また、認知症カフェに参加される認知症高齢者、家族、地域住民へのPRについては、各関係機関の協力のもと「広報チーム」による取り組みが行われてきた。

その中で本事例の特徴としては、学生が、認知症高齢者とコミュニケーションを図るために必要とされる態度やコミュニケーション技術について、継続して学ぶ機会を設けていることだ。プロジェクト活動を通して、学生は認知症高齢者への関わり方を学び、取り組む過程を通して、試行錯誤を繰り返しながら、上手く関わる事ができたという成功体験を少しずつ蓄積していくと考えられる。それが、認知症カフェの活動者としての意欲や認知症高齢者への向き合い方にも変化をもたらしているといえる。そして、プロジェクトでの体験が学生間で共有され、定着していくことは結果的に認知症高齢者への対応力が学生全体で高まっていくことにも繋がるのではないだろうか。

認知症カフェの活動者に求められる力量として、認知症高齢者とのコミュニケーションを図るための態度やコミュニケーション技術は求められるが、このようなものは一朝一夕に身につけられるものではない。事例として挙げたプロジェクトでは、継続した取り組みによってそのようなものを身につけていき、学生の認知症高齢者へのかかわり方は前向きになっていった。したがって、各地域で展開されている認知症カフェにおいても、認知症高齢者へのコミュニケーションの図り方を継続的に学習できる場を設けていくことが、活動者を育成していく上でも必要ではないかといえる。

付記

本稿は、平成27・28年度関西福祉科学大学「共同研究」による研究成果及び平成29・30・31年度地域連携公認プログラムによる取り組み成果を再構成したものである。

謝辞

「関西福祉科学大学バリデーション・プロジェクト」の活動に際して、日頃よりご協力、ご支援を賜っている柏原市役所、社会福祉法人柏原市社会福祉協議会、社会福祉法人日本コイノニア福祉会をはじめとした各種関係者の方々に感謝申し上げます。

【注】

- 1) 認知症カフェの定義については未だ定まっていないが、認知症介護研究・研修仙台センター「認知症カフェの実態に関する調査研究事業報告書」では、認知症カフェの共通概念として下記が示された。
 - ・認知症の人と介護者を第一に、地域住民、専門職も、住みやすい地域社会づくりに貢献できる場所であること
 - ・認知症カフェは、多様な人々の対話と会話を基盤としており、地域そして地域住民とのゆるやかな調和と協働により成立するものである
 さらに同報告書では認知症カフェとは、「認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場」と説明されているため、本論においても同様の意味で用いる。
- 2) 例えば広島県福山市にある「ガーデンカフェ」や山梨県身延町にある「オレンジカフェ身延山」などが挙げられる。
- 3) プロジェクトでは、認知症カフェを現在2か所運営しているが、本論では主に「カフェほのぼの」を取り上げる。ただし、活動の理念やプログラムなどの内容、プロジェクトの体制については、「コイノニアカフェ」も同様に取り組んでいる。
- 4) 「カフェほのぼの」の取り組みに関する記事は、読売新聞2016年2月18日版で紹介された。
- 5) グループリーダーおよびコ・リーダーは、バリデーションを用いながら参加した認知症高齢者同士が活発に交流できるように促す役割で、グループバリデーションの要となる。コ・リーダーとは、主たる介護者であるグループリーダーを補助する介護者のことを指す。グループバリデーションにおいては、高齢者の移動、プログラム、評価などの手伝いを担う。
- 6) バリデーションをある程度のレベルで修得したと考えられる以下の要件をすべて満たすことを、役割を担う際の基準と

している。【コ・リーダー】プロジェクトのバリエーション研修会への参加6回以上、特別養護老人ホーム等の認知症高齢者へのバリエーションの実践12回以上、学内で実施するグループバリエーションの研修会でのリハーサルへの参加3回以上【グループリーダー】認知症カフェで実施するグループバリエーションのコ・リーダーの担当1回以上

する調査研究事業報告書」, 2017年
三田村知子「間接的にバリエーションを経験した施設職員の気づきの特徴とバリエーションの理念からみた気づきの構造に関する研究」『関西女子短期大学紀要』(25), 2015年, 23-40

【引用文献】

- 1) 厚生労働省「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」, 2015年
- 2) 厚生労働省「認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」, 2017年（2017年7月5日改訂）
- 3) 認知症施策推進関係閣僚会議「認知症施策推進大綱」, 2019年
- 4) 武地一編著・監訳『認知症カフェハンドブック』クリエイツかもがわ, 2015年, 89
- 5) 浅岡雅子『魅力あふれる認知症カフェの始め方・続け方』翔泳社, 2015年, 20-21
- 6) 前掲書4), 60-61
- 7) 矢吹知之、ベレ・ミーセン『認知症カフェ企画・運営マニュアル 押さえておきたい原則と継続のポイント』中央法規, 2018年, 46
- 8) 前掲書4), 144
- 9) 前掲書4), 144
- 10) 武地一『ようこそ、認知症カフェへ 未来をつくる地域包括ケアのかたち』ミネルヴァ書房, 2017年, 134
- 11) 公益社団法人認知症の人と家族の会「認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業報告書」2013年, 40-41
- 12) 都村尚子『バリエーションへの誘い 認知症と共に生きるお年寄りから学ぶこと』全国コミュニティライフサポートセンター, 2014年, 36
- 13) Naomi Feil and Vicki de Klarl-Rubin (2012) 「Validation Breakthrough: Simple Techniques for Communicating with People with Alzheimer's and Other Dementias, Third Edition」(=ナオミ・ファイル、ビッキー・デクラーク・ルビン著、高橋誠一、篠崎人理監訳、飛松美紀訳『バリエーション・ブレイクスルー 認知症ケアの画期的メソッド』全国コミュニティライフサポートセンター, 2014年, 286-287
- 14) 前掲書11), 37
- 15) 前掲書11), 39-40

【参考文献】

都村尚子「バリエーション研修プログラムが職員に及ぼす効果の可能性に関する研究」『日本福祉のまちづくり学会』17(1), 2015年, 13-20
認知症介護研究・研修仙台センター「認知症カフェの実態に関